

14.AIが職を代替する時代

医事万華鏡

AI（人工知能）が社会に浸透し、様々な分野・業種で導入されるようになった昨今。AIが代替する職業について盛んに議論されています。既に英国・オックスフォード大学の教授らは、米国において10～20年以内に労働人口の47%が機械に代替されるリスクが70%以上、という推計結果を発表しました。また、彼らが記した『雇用の未来—コンピューター化によって仕事は失われるのか』（2013）も話題になりました。同書の趣旨は3つ。すなわち、①技術発展に伴い機械化リスクの高い職業が代替される②機械化（自動化）のリスクが中程度の職業は、技術的なボトルネックが解消された後に代替される③多方面の技能を要する職業は代替リスクが低い—です。一方日本の野村総研も同様の研究報告を発表し、10～20年後に日本の労働人口の49%が就いている国内の601の職業が、AIもしくはロボットによって代替可能であるとなりました。その数値は極端であるとの指摘もありますが、ただ一つ言えることは、単純作業（資料整理や入力・管理、機械操作）は間違いなくAIにとって代わられるということです。実に先のオックスフォード

大野村総研の報告では、将来100の職種がAIによって代替される可能性が高いと指摘されています。人材不足と言われて久しい時代に、AIが果たす役割はこの点にこそ大きいと言えるでしょう。なお、同報告書内では、AIが代替できない職種についても言及し、専門性の高い職種や、アートや創造性が問われる職種は奪われる可能性は低いとしています。

ところで、医師はAIが代替する100の職種の中に入っているかもしれませんが、果たしてでしょうか。昨今、コンピューター断層撮影（CT）画像読影にAIが活用されつつあり、人の見落としを補助するAIは、今後医療現場の業務効率化に寄与することでしょう。加えて、レントゲン画像やMRI検査にもAIが応用されつつあります。また、医療診断や治療選択分野においてもAIの活用が加速しています。とはいえ、AIは医療の一部を補うとしても、医師としての役割を果たすことは難しいのではないのでしょうか。医師は患者さんの心に寄り添うことが求められる中で、機械的な「診断」だけを人は求めているからです。

AIが多くの職種を代替する時代が迫ってきました。こうした時代の流れに逆らうことなく、単純作業こそAIに委ね、専門性の高い職種に携わる人材の育成に努めることが今まさに期待されています。

（JMS主幹・野村元久）

